

## 幼な児をはぐくむ自然

### 室谷幸吉

「デンデンムシ知ってるでしょ。カタツムリを、さ」

またX君はきつく頭を横にふりました。X君のママが、

「カタツムリ見たことないのよ。テレビならくさるほど見てるけど」

「X君、じゃ、どんな歌知ってる？」

歌は気持ちが温いとき、湧くように唇からあふれ出てくるものです。場所は家の前の三メートル道路、史子は今、体いっぱい幸福感にみち、ママとつかず離れず、近所の奥さんと立ち話しているママの声を、聞くともなく聞きとっています。史子は二歳三ヵ月です。道ぞいのドウダンのいけ垣の根かたにしゃがみ、足もとの土を指でいじりいじり、

デンデンムシムシカタツムリ

おまえのあたまでは どこにある

ツノだせ ヤリだせ……

格調正しい歌いぶりです。

「Xちゃんもいっしょに歌ってごらん。歌えるでしょ」

近所の奥さんの子どもX君は、史子よりざっと一年年上です。X君は首を横さまに振り、キッとしたしぐさで歌えないことを示しました。

「この子、そんな歌知らないのよ」とX君のママ。

史子のママの声にこたえX君が歌い出したのは、テレビのコマーシャルソング。その時史子は『メダカの学校は川の中 ちょよとのぞいて見てごらん……』を歌いおわり、『スズメの学校の先生は ムチをふりふりチーパッパ……』、そのメロディーを半分ほどで切りあげ、つづけて『春ははよから川べのアシで カニが店出しトコヤでござる』と歌い移っていました。たまに時間ふさぎにテレビマンガを見る程度の史子には、CMソングのお相手はでき

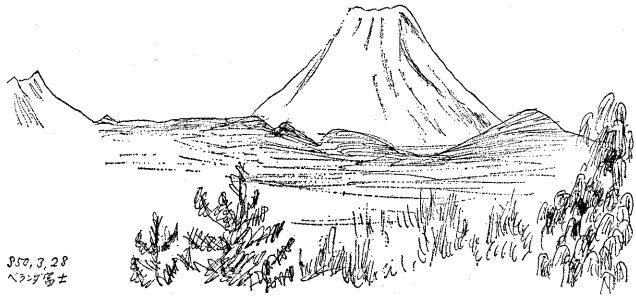


史子画

ません。だが史子の歌のレパートリーは相当に広く、その歌のほとんどは、たとえばメダカの歌は水槽のメダカをのぞきつつ、デンデンムシの歌は庭木の葉に乗ったほんとうに動くカタツムリを見つつ、つまり実物に触れ、その物にくっつけて覚えたものです。テレビという虚像世界から見知ったものは、大体根無しの造花、命のかわいたでっちあげでしょう。それに比べ史子の歌(学び)にはしかとした根がある、根があるから生きている、生きているから創造的展開が見込まれる、こんなふうに言えそうです。商業主義の色に染まったCMソングと、いのちある物との接触から盛りあがった歌ことばと、かりに「文化」というはかりにかけた時、目盛りはどんなふうに読めるでしょうか。デンデンムシを歌う時、

のカタツムリが這い回り、あるいはツノをのびし、あるいは、首を殻にひっこめているでしょう。カニの床屋を歌う時、史子の目にはハサミをふっているカニが見えるかもしれません。史子は夏の一日、「バァバ、カノデンデンは？ カノデンデンつけて」と祖母に催促しました。カノデンデンは蚊取線香につけた史子の創作名詞(複合語)で『蚊をとるのに使うデンデンムシ型ウズマキ』そんな幼児の考えが、陽をすかして見る絵ガラスのように鮮かに察せられます。

てのひらほどの小さな庭の一隅に砂場を用意しました。X君も△ちゃんも近所の子らがこの砂場で遊びます。多様な形のプラスチックのアクセサリーが散乱しています。器に砂を詰め型ヌキし、オマンジュウが並び、人工衛星が打ち出され、マリヤ同じ形の地球が……そ



350, 3, 29  
ヘンダ博士

れにもまして史子には、アリンコの散歩道、アリのアパート作りの楽しめる砂場です。植木用シャベルで土を掘る、草花を移植する、

そんな技術を二歳にして史子は心得ました。シャベル振りたてバケツで給水、当然のことに上衣の袖はベシヨベシヨ、服は泥でベトベト——母なる大地という大仰みたいですが、命の根をはぐくみ、その命の還りゆく郷である土、幼な児は土とひとつにして育てる時、たくましくも賢くもなることを史子によって実証しつつあるわけです。生後一年近く汚れた空気の都内に住み、カゼひきやすく顔色さえずひ弱かった体が、現在地へ転住して二、三ヵ月で、早くもリンゴほっぺになり健康への効果が見えました。今はプリプリして力が体にあふれ、知恵つぎのテノンポにひそかに驚いています。ズズメもウグイスもカラズもミミズもコオロギもズズムシも、みな実物教育です。ウメ・モモ・ナシ・グミ・カキ・クワ

の実すべて成り木による実物知です。白、赤、黄、桃、紫、青、緑、色名、色あいも庭に咲く花によって知ったようです。クリのイガも栗拾いも庭で味わい知った秋の体験のひとつ。草引き、除草ですね。これまた見よう見まねでのみこみ、庭でひとり遊びしているが、とのぞいてみると草取りしています。引抜いてはいけない草花と、除いた方がいい雑草、ハコベ・オオバコ・ペンペン草・ズズメノテッポウ・ヤブカラシなどを教えるともなく区別できるところになったとはすばらしい。身のまわりを彩る数々の自然物、ゆたかな自然のなかに開放され行動の自由を得た時、子どもがいかにも多くのものを成長素としてその自然から吸収するか、そのめざましさに驚く、日々です。